

境界エレベータ

osi7

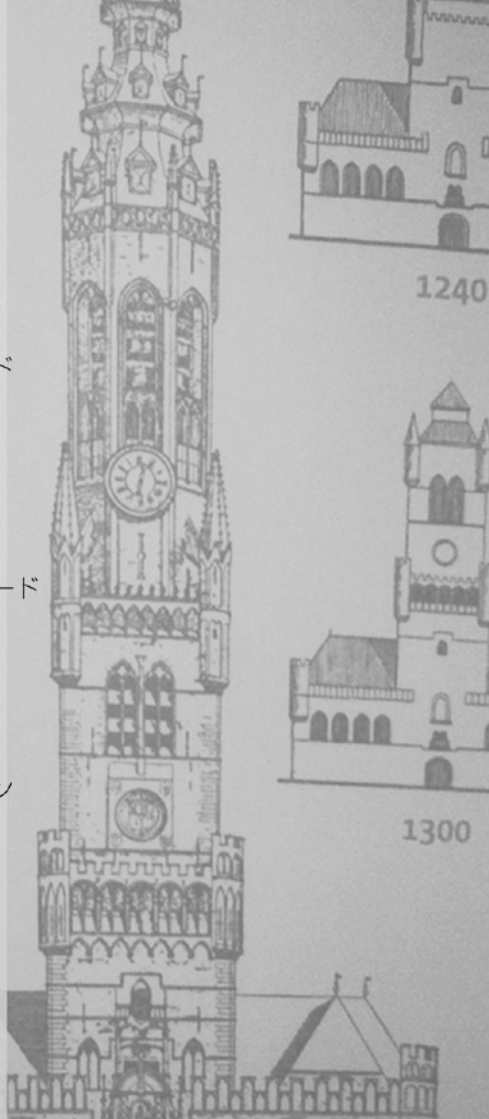
5. ナイツ

4. ハックザワールド

3. オーバーレイヤード

2. グランドデザイン

1. 接地



殴ってから考える精霊使い
坂本 七重



昨日の常識は今日の非常識
天満寺 琴乃



昼行灯
カギリ



順調にグレル
岡 彩月



ピンと来たら笑顔で殺戮
カミヒ



悪食という名の博愛主義
秋月 みさき



ブローグ

陽が落ちた。

鞆から鍵を取り出してドアに差し込み、金属と金属がこすれる甲高い音が疲れ切った脳に響く。一日中歩き回ったせいでドアを開く腕も熱を持ち、ドアノブの冷たさが心地よく感じてしまっただけ。

つんのめるように中に入り、足下に鞆を落とす。窓から差し込む月明かりがベッドや机を浮かび上がらせている。部屋の中は廊下と違ってまだ昼間の熱が残っていた。惰性で足を二、三步踏み出したところで、ベッドに倒れ込んだ。自分の身体を、ぎゅっとシートと二緒に抱きしめる。

目を閉じて青白い世界を視界から追い出して、真の闇へ。

「……今日も成果なし、でしょ」

ベッドに誰かが座っていた。先ほどまでベッドを照らしていた月明かりは、今は枕元に座る誰かを照らしている。ささやきのような小さな声が円彩月の意識を闇から引き上げる。

「そのまま寝たら、制服が皺だらけになるよ？」

それは困るでしょ、とわかりきった事を言った。

彼女は正しい。いつだって正しい。

円はのっそりと上半身を立て、ボタンを外し、上着を脱いで、ファスナーを下ろしてスカートを下下に落とした。

体をねじったとき、一瞬、姿見に映る自分を見てしまった。

気が落ち込む。布団に倒れ込んだ。見たくなかったので、今度は枕に顔を埋めた。

「……まったく、だらしないわね」

誰かが立ち上がる気配。衣擦れの音がする。円が脱いだ制服をたたんでくれているらしい。

さちんとそろえてベッドの上に置くと、また枕元に座ったらしく、ベッドが沈み込んだ。

「……………っ！」

無言で背中を触られた。体温なんてものがない指先が、背骨と肩胛骨の間を往復する。

「だいぶ、馴染んできたかな？」

触られた部分が火照る。彼女は何かをなぞるように撫でていた。なぞった部分は幾何学的な軌跡を描き、軌跡はある紋様を形作る。紋様は熱を帯び、その熱は今や体中に伝播して息苦し

さを感じるほどになっていた。

「今日のお知らせー」

だが彼女の言葉は指先同様冷え切って、心をえぐる鋭さを宿している。

「北御池の住宅街で短時間の神隠し、外海で行方不明者一名、あと舟入方面で怪異と遭遇し帰還」御坂市は例年ではもう晴れているはずの霧がまだ続いていた。JR駅の線路より陸地側は晴れたが、海よりの地域、つまり繁華街はほとんど霧に埋没した。海に面する大型ホテルの内側にあるせいで、まるで城壁に守られた街のような繁華街は霧に沈んでいるように見えるのだ。

その幻想的な光景は好評で、観光名所のタワーホテル展望台は急遽、海側だけでなく内陸側にも据え付けの双眼鏡を設置するほどだった。霧の城塞都市、などとキャンペーンを始める旅行会社もあった。

その異常気象の真相を知る人間は、円と彼女だけだった。霧は彼女の神域。その中であった異常は離れていても検知できる。

「それで、円ちゃんは何か見つけられた？」

彼女はいつも、最後にそう付け加える。何もないことをわかっているのに。わかっているねていた。

円の背中の紋様は、すでに耐え難いほど熱を宿している。

「……何も、見つけられませんでしたよ」

「そう」

答えると、熱がすつと引く。部屋の生ぬるい空気がにじんだ汗を中途半端に乾かして不快感だけが残る。

「じゃあ、どこからつぶしに行こうか？ それとも先輩のを見に行く？」

カミヒは続けて言った。円の位置からは見えないが、円は彼女が笑顔で言ったに違いないと思ひ、事実そうであった。

「どちらに行っても、事後じゃないですか。終わったあとに行って何の意味があるんです

……？」

「あるじゃない、意味なら。あなたの求めるものがその先にあるかもしれないに」

求めるもの。欠落した記憶を埋めるもの。

初めは「何かを忘れてる気がする」だけだった。そして、理由もなく「誰かに訊かない」とも思った。

円は何を忘れてるかもわからなかった。気づいていなかった。クラスメイトとの会話の中

でそれが話題にならないわけがないのに、円はうまく話をずらして自分の話にならないように誘導していた。無意識で。無意識を操作されていると、目の前の少女は円に告げたが。

誰かに何かを訊かなければならないと、漠然とした焦燥感が円を駆り立てた。今まで相談を受ける側だったが、受けるだけではなくて相談することも増えた。何を訊けばいいのかわからないままの相談なので、心の内にたまるその焦燥感を伝えることぐらいいしかなかったが、友人達は様々な解釈をして、それは恋だの愛だのと見当違いの回答をくれたものだ。

だがそんな可愛いものではなかった。

数ヶ月前にクラスを凍らせた倉池や天満寺の一件で、円は自分が求めるものを掴んだ。密室で不思議な事件が発生したことを聞いたとき、確信めいたものを得たのだ。これは自分も体験したことがあると。体験したことが何かは思い出せないが、その思い出せないことに気づき、同時に自分の過去の一部も思い出せないことに気づいた。

円は、自分の家のことを忘れていた。

家があったことは覚えているし両親の顔も思い出せるが、この学生寮に移る前に、どこに住んでいたのか、そこで家族とどんな会話をしたか、そういうことが全くわからなくなっていた。一部を白く塗りつぶされた記憶の風景。

なぜ忘れてしまったのかもわからなかった。ただ、この不思議な体験に関係があるという、その一点だけは間違いないかった。

形のない焦燥感は、原因究明をせねばならないという強迫観念に変わり、がむしゃらに真実を追い続けた。

そして今、円はその真実の一端とも言うべき人物が円を消耗させる原因となっていた。

「……でも、誰もいない裏の世界を渡って、食い残しののようなモノを見ても仕方ないです」
食い残し。円は自分が口にした言葉のおぞましさに気づいて、身震いした。

「被害者を追うわけじゃないし。私たちが追うのは加害者。毎日どこかで発生している怪異の中の一つがあなたの記憶を閉じたというなら、虱潰しに全部当たっていけばいい。私とそうきめたでしょ？ 円ちゃん」

少女——カミヒは海神としての力を振るい、円の目的を達成させようと協力してくれる。「ただ利害が一致しているだけ」という風にも思われたが、カミヒ手ずからの襖ぎを受け、背中に入れ墨のような紋様を刻まれた円は、仮初めの依り代となっていた。円は七重と同じように、ミサカの土地では死なず、ミサカの土地で発生した怪異に対しては圧倒的な耐性を得、祈念すれば奇蹟を顕すことができるようになった。

「円ちゃんだって、一日街中を巡って異界探しのパトロールしてるわけじゃない？ 残念ながら今日はめばしい収穫はなかったみたいだけど」

だから余力、あるでしょ？ という言葉が言外に隠されている。

円は学校を無断欠席している。

夏休みが終わり、もう十日間も。

その時間の全てを記憶の搜索にあてている。昼はもちろん、夜もだ。

昼は街を徘徊し、見覚えのある道がないか、風景はないかをあてもなく探す。同時に、怪異が発生していないか見て回る。

夜はカミヒが知らせる怪異の気配を追う。異界が現出している場合は、その中まで入ることもある。カミヒがあたりを霧に包むと、簡単に世界が切り替わって異界にはいることが出来た。御坂神社で離れた場所を瞬間移動したのと同じらしい。行き先が別の世界と言うだけで。

円はベッドから立ち上がった。

クローゼットから私服を取り出し、薄手のジャケットを着込む。

「それじゃあ、いきますかー。玄関のところにいるね」

カミヒが姿を消した。円はドアを開いて出ていった。

月明かりの部屋に静寂が戻る。

「……本当に、こんなことで」

つぶやきは誰にも聞こえず、続く言葉は飲み込まれて自分にすら伝わりそうになかった。

1 楼地

放課後、私はいつものように奴隷稼業に励むため秋月さんの研究室に行く、赤い髪をした魔女は机の上でだらしなく崩れていた。座っていても立っていても、いつも姿勢だけはいい人にしては、珍しい。残暑厳しく、八月も終わろうかというのに気温は三十度を割ることはなく、体力が尽きたのかも知れない。

「天満寺。君は最近の若いのにしてはマメだな……。そんな毎日来ても掃除するところなどないと思うぞ」

年齢はよく知らないけれど、三十にはまだなっていない彼女はもう少し身の回りの事に気を配るべきだと思う。まあ、部屋にがらくたと言うには大きすぎるシヨベルカーの先端や、どこかの家屋から引きがしたような煉瓦の壁があったり、屋内の飾り付けについては何か独特の信条があるみたいだ。かろうじて許容できるのは壁際に据え付けられた動かない柱時計ぐらい。そんな室内だから埃や塵の出所には事欠かないのだが、集めてきたコレクシヨンが埃まみれに

なることは別に頓着しないようだ。

私は別の研究室からバケツと雑巾を失敬し、拭き掃除をすることにした。

部屋の隅でじゃぶじゃぶと雑巾を洗い始めた私を、秋月さんは死んだ魚のような目で眺めていた。

「君、掃除は趣味か何かか？」

「……別に、趣味にするほどのことじゃないです」

「綺麗に片付いていると気分がいいタイプ、とか」

「それなら初めからこんな部屋に寄りつかないですよ。発狂します」

「好きでもないし、潔癖症というわけでもない。でも、毎日やってきては他人様の部屋を掃除する。ああ、そうか」

ぼん、と手を叩く。

「——ライフワーク、という奴だな？」

「……全く違います」

そんな人生、やってられない。

「掃除ボットがカーペットの染み抜きから庭の芝刈りまで全部やってくれるこの時代に、バケ

ツに水汲んで雑巾がけとは普通の女子中学生にはなかなか辿り着けない境地だと思っただがな」
 「私も雑巾がけなんて初等部の実習以来ですよ」

「……それはそれは。頼むから部屋の物を壊さないでくれよ」

雑巾で柱時計を拭いていると、窓のように偽装されている環境透過ディスプレイにポップアップメッセージが表示され、懐古趣味全開のベルが鳴り響く。あの高周波で金属製の鐘を叩く音、頭にキンキン響いて好きじゃないんだけど。

秋月さんは椅子をくると回してディスプレイに向き直ると、接続、とつぶやいた。ポップアップメッセージが回転してウィンドウになり、発信者の情報を表示する。

発信者は御坂神社、しかし映像は送信されてきていないようで『NoImage』という赤文字が浮かんでいた。

「どちら様かな？」

秋月さんは表示でわかっているにもかかわらず誰何すい、かした。御坂神社からここにボイスチャットしてくるような人、坂木七重さかき ななえ先輩ぐらいしかいないでしょうに。

『私だ』

しかし、返事は予想とは違った。涼やかな抑揚のある声。夏休み中にバイトした神社で聞いた声だ。

「……珍しい。あなたが私に接触するなんて、どんな風の吹き回しです？」
 秋月さんが敬語を使つてびっくりした。私や先輩相手にはもちろん、たとえ教頭やもつと上の理事とか出てきても口調を変えそうにない人だし、実際聞いたことはない。
 『警告を』

「なんと、それは輪を掛けて珍しい。明日は槍でも降りますか？ それとも火の玉が降りそそいで学園が全焼しますか？」
 端的な相手の言葉に、挑発としか思えないことを返す。秋月さんは口元こそ馬鹿にするように歪めていたけど、相手の攻撃を見定めるように眼鏡の奥で目を細めていた。

『円彩月を知っているか』

柱時計を拭く手が止まってしまふ。クラスメイトの名前だ。今年の夏からよく耳にする名前である。休み中には同じバイトをした。そのとき、ちよつと二人とも大変得難い体験をしたけど、そのときに声の主とも会っている。

円に何かあったのだろうか？

「——円彩月。天満寺のクラスメイトにそのような名前を見た気がしますね。それが？」

うそぶく秋月さん。ものすごくわざとらしくかった。ここで見ている私にはよくわかるが、知っているはぐらかしている雰囲気だ。

『それがだつて？ 命を救った相手のことぐらい覚えておいたらどうか、魔術師』
え？ 今なんて？

「私は日夜、人の命を救ってますよ。一人二人の名前を覚えてなんていられません。言われてみれば、そんなこともあったかもしれない、と思う程度だ」

『救った命も奪った命も、等しく軽く扱うのはさすが魔術師だ。好かん』

「それはどういたしまして。それで、円がどうかしましたか？」

『気をつけることだ。命を狙ってくるぞ』

夕方にさしかかった陽が赤く染める教室は、数秒、時が止まった。

「——私の？」

『秋月みさきの命を』

『誰が？』

『円彩月がだ』

秋月さんが中指でメガネのフレームを上げた。

「興味深い話です。できればもう少し詳しく伺いたい」

『渡波神社が復興し、忘れ去られていた神に巫女がついた。七重と同じように神降ろしの巫女だ』

「同じ？ 神降ろしの儀式もせずに宿したと？ ミサカの神話上、それはあり得ない」

『お前とミサカの儀式体系を論じるつもりはないよ。ただ事実だ。お前にとって不幸中の幸いなのは、私の見立てでは七重ほど完全に重なったわけではないということだ。せいぜい分け身が宿っている程度だろう』

「十分脅威ですよ。この土地では死なないということでしょうか？ それで、どうして私を殺しに来るんです？」

『もちろん、お前が邪魔だからさ。神の治める土地に外様が土足で上がりこんで、自分の領地を確保し始めたんだ。誰でも怒る』

「寛大な神もいるみたいですが？」

『それも時と場合によるさ』

秋月さんは、取り乱す様子もなくデスクからティーカップを持ち上げて一口すすった。
「……となると、私は早めに荷物をまとめて出ていった方がいいということか」

『それはできないだろうな』

間髪入れずに断定された。

『この土地の維持は七重一人では厳しい。今、お前に出て行かれるのは困ったことになる』
 「それこそ、新しい巫女に頼めばいいでしょう。再興したのなら二人で協力して異界を鎮圧してまわれればいい」

『頼めるわけないだろう。私と向こうは敵対関係だ』

ははは、と笑う。

「そんなことを、私が気にすると？ 調子に乗るなよローカルゴッド」

カップを静かにデスクに置くと、メガネを外してその横に置いた。

「私は魔術師だ。世界を変革して浸食するのが生業だが、最近御坂市で行っていた行為は辛めに見積もってもおおよそ善行のうちに入る奉仕行為だ。それを略奪扱いされてまでここにおいてやる義理はないぞ」

敬語を捨てた魔術師に、デイスプレイの向こう側の相手は初めて感情らしきものを乗せた声を返した。

「奉仕行為？ 巫山戯な。私が、お前が街中に仕込んでいる興味深い実験について知らないだけでも？ 場所を無断借用した上に土地神を冒瀆する様な術式を埋め込んで、十分好き勝手し

ているだろう。それに目をつぶってやっているんだ。対価は渡している。お前の行為は奉仕などではない」

ふん、と鼻を鳴らして、メガネをつけ治す。

「つまり、私はここから出るなど？ 見習い巫女が一人で怪異を平らげることができるまで手を貸せと？」

『その通り。学園から出ると命の保障はできない』

「彼女も死にくくなっているなら、少し強引に出かけても問題なさそうだが？」

『円のほうはなんとかなるかもしれないがな。そうだ、当然だが私は今神社にいる』

ズゴン、と凄いい音が室内に響いた。続いて地震並の振動がフロアを襲い、私は柱時計に捕まって体を支える。

部屋の中央で盛大に埃が舞っていた。その真ん中で、アスファルトや岩盤を削り取る鋼鉄製のショベルカーのアレが、真つ二つになって左右に倒れていた。

『影響範囲内であれば、離れていてもこれくらいのことではできる。海神は霧と熱を操るが、見つかれば火傷じゃ済まないだろうな。それでもよければ私は止めないが』

表示が『Disconnect』になり、ウィンドウが閉じた。



私はつとめて平静に、舞い上がった埃を箒で掃き始めた。

「さて！」

パン、と乾いた音が研究室に響く。

「聞かれてしまったてはしょうがないな！」

「何も聞いてませんってば」

思わず反論する。

「同じ部屋で特に可聴域制限もせずに会話したんだ。聞こえないわけはない」

「いいえ、時計を拭くのに忙しかつたので何も聞こえませんでした」

ティーカップを持ち上げてくいと煽り、ちちち、と人差し指を振った。

「知っているか？ 人間は自分の感覚器が受け取った全ての情報を覚えてるんだ。意識の上にはのぼってこなくても、刺激のパターンとして肉体自身が覚えていることもある。つまり、人の声を耳のすぐそばでキャンセルしていいないのであれば、それは聞こえているということだ」

「今忘れしました」

「ラストセクションでもう一度聞かせてもいいんだけど？」

録音してあるんだ……。なんとしても私を巻き込みたいらしい。

「……そこまでしなくてもいいですよ。で、なんですか？」

満足げにうなずいた秋月さんは椅子に座り直した。デスクに肘をついて顔のままで組み、貫禄を出そうとしているようだった。

「今の通話の相手、誰だかわかるか？」

「確か御坂神社の——人ですよね」

『御坂神社の神様ですよね』とは言いつらい。常識人として厳しい。

「残念ながらヒトではない」

秋月さんは私の答えが期待通りだったようで、うれしそうに否定した。

「知ってました」

その顔があまりにうれしそうだったので、またしても反射的に言葉が出る。秋月さんの笑顔が一転苦虫を噛みつぶしたようになる。

「知ってるって、今のが坂木が奉ずる祭神だと知ってるか？ ……どっちなんだ、お前」

「……休み中に神社でバイトしてて、そのとき会ってるんですよ」

「おいおい、土地神がただのバイト相手に気軽に姿を晒してると言うのか……？ 何考えてるんだあの昼行灯」

「気軽にって訳じゃないですよ。坂木先輩の身の回りの世話をしてくれる人が足りなかったみたいで、私たちと神事の手伝いをしてたぐらいいですし、人前にそんなに出てたわけじゃないです」

「祈祷の儀式を祈祷される対象が手伝うとか論理が破綻してるぞ……。まあ、その話は別にいい」
ごほん、と仕切り直す。

「今の声の相手は、神だ」

「……知ってますって」

一緒に空を飛んだこともあるし、そこは何も考えずに信じていることにしていた。こう、改めて他の人から告げられても「あ、やっぱり？」程度にしかな感じないのは、うん、たぶん私自身が学園七不思議なんていう呪いの儀式を実践した人間だからかもしれない。慣れつつ恐ろしい。

「地球上に神と呼ばれる存在は人類の総人口と同程度いるらしいが、大きく分けて多神教の神と一神教の神がある。多神教と一神教の大きな違いは祈る対象が多いか少ないかという点であって、それ自体は神話や宗教の成立過程に依るところが大きく、我々の業界から見ても作法が違うだけで中身はあまり変わらない。人間が彼らに対して求めることが変わらないからだ。

つまり、神という概念は機能としては人の祈りを聞き届けて奇跡を起こす、それだけが彼らの機能だ」

なにか、神とはなんぞやという講釈が始められていた。

「自然現象や自然物そのものを崇拜する精霊信仰と違い、神は人間をベースに想像されることからパーソナリティをもっている。ここが重要だ。分類としては、人格を持たないものを精霊、持つ物を神と称する。人格とは、個人の取捨選択の優先順位のことであり、くだけて言えば「好き嫌い」のことだ。人の利益を鑑みずと与えられた機能を淡々とこなすのが精霊だとすれば、利益を鑑みて融通を利かせるのが神といえる。元々が人間の信仰を基盤としているからか、より人間の欲望を反映しやすく使役がしやすいところが、大きな違いだ」

宗教の授業の内容とは全く違う、「神をどう使うか」という身も蓋もない話だ。人の倫理や道徳を定義して『どう生きるべきか』を示すはずの概念が、大衆に迎合するあまり即物的な利益を与えるように変化していくのは、歴史の授業を受けているうちから薄々気づいてはいたが、彼ら魔術師はその最先端を走っているようだった。

しかし、よく考えれば同じ事を私たちは日常的にしているのだ。神社でお賽銭を放り願いの事をしたり、絵馬に合格祈願と書いたり、どの願い事も即物的で個人的な物だ。仏の道の最終目

標は死後に極楽浄土へ到達することだし、キリスト教なんて世界滅ぼして自分たちが安寧に暮らせるための神の国を作るとかいつている。『世界平和』とか『飢餓をなくす』とか『人類平等』とか、そういうのなんて見たことない。

全部、自分個人に対象が当たっている。

「だが、ミサカの神はひと味違う。この土地は古来より独自の神話を持っていて、今もそれが根強い。形こそ日本神道の体をとっているが、重要とされる夏祭りや冬祭りは独自の儀式を色濃く残している。それが廃れずに今も続けられているのは、ひとえに氏子の数が多く、皆が祭りに参加して継承が行われているからだ。このあたりはうまく営業活動をしている御坂神社の功績だと思うが、信仰の根幹となる伝説である山の神と海の神の争いを郷土史として学校で教えているところが大きい。そのせいで市内における共同幻想の認識率が世界宗教並みに高く、自然と祭りへの参加者も増え、それが新しい氏子獲得の基盤となっている」

カップを見つめるように語っていた彼女は、そこで私に目を向けた。

「君も学校で習っただろう？ ミサカの伝説を」

「ええ、まあ」

「どんな風にならった？」

「ええと、確か、山の神と海の神が土地を巡って争っていて、山の神は吹雪で人を殺し、海の神は湿気と熱で食べ物を腐らせたって。昔の人は争いをやめてもらうためにそれぞれの社を建てて奉り、夏の暑さを払うために山の神に祈り、冬の寒さを払うために海の神に祈るようになったって」

「その通り、ミサカの神話だ。だが、これは厳密に言えば神の話ではなく精霊の話だ。ミサカの神は季節ごとの現象が神話化したものだが、本来なら彼らは精霊と呼ばれるべきだった」

確かに、その分類で言う神というより、自然そのもの、という気がする。

「一般的に精霊というと汎神論で言われる万物に宿る靈魂のことを指し、無機物、有機物、実体のない現象そのもの、など、何にでも区別無く宿る。だが、その何でもなかった『何か』に人は意味を見いだして様々な伝説や物語を付与していく。人に話し広めるだけではなく、それが生活様式の一部になる場合もある。これらは広く宗教と呼んでいいだろう。そして人々のイメージが偶像として確立されたときに精霊は神として成立する。精霊は、神たらしめる伝説や物語を内包して神にふさわしい力を備えるようになる。神にふさわしい力とは、奇跡であり、つまりは物理法則とは一線を画した独自のルールのことだ。今ではこれを怪異と呼ぶ。

本質的に精霊は怪異を集約した特異点とも言うべき存在で、神とはその中の一派生だ。地球

上に存在する宗教の数だけ神はいるわけだが、その中でも今みたいに自らの意志でもってポイスチャットをかけてくるような、人と変わらないアイデンティティーを確立したものは世界でも数体しかない」

ほかの数体というのは、キリストとかアッラーとかいう名前なんだろうか。

考えが顔に出たのか、秋月さんはにやりと笑った。

「何を考えているかわかるぞ、答えはノーだ。世界宗教はその規模から分派の数も多く、単一人格を持たせられるほど神の定義ができない。故に人の姿をとって闊歩することは不可能だ。ただ奇跡などの形でのみ存在を確認できる程度だな」

秋月さんは紅茶を飲んで、次の一言まで間を取った。

「彼らは自身が特異点であることを利用して様々な超自然現象を起こす。もちろん、神には神たりえる背景が必要不可欠で、それによって束縛も受けるので万能ではない。御坂神社の祭神は山の神で冷気と風を支配する機能を持ち、だから、風を起こし雨を降らせ水で街を閉ざすことができる。また、彼女の本質である伝説の中で彼女が死ぬシチュエーションがないので、彼女は死ぬこともない」

柱時計を拭く手は完全に止まっていた。

「御坂神社は一般的な神社と違い、地場の独自の伝説を保持してきた。さらにこの現代においても廃れさせることもなく時代に合わせて形を変え信仰を維持している。先ほど言った教育のように、限定された地域に神社が効率的に伝説を流布させた結果だ。また、その特性により土地に対する支配も強い。このグラフを見たまえ」

環境透過ディスプレイに折れ線グラフが現れる。

凡例に青が御坂市、赤が隣町の逢瀬市（おとせ）、と書いてある。両方とも小刻みに上下しているが、全体としてみると緩やかな正の相関を示していた。ただし、青の線は赤の三割ほど下方である。さらにほかの隣接都市が表示される。いずれの都市に比べても御坂市は二割〜三割程度。明らかに御坂市が低かった。

「これは異界発生頻度のグラフだ。御坂市以外のものは繁華街付近にしか設置してないのでおどろばな値だがそれでもこのレベルだ。御坂市はこの地方でも大きな街だが、その範囲をカバーしてなおかつ低いレベルに維持し続けるのは人には到底真似できない。ミサカの神の支配が他の異界の発生を排除しているからだ」

「……神様がすごいことはわかりましたけど、それがどうしたんですか？」

「……もう少し驚けよ張り合いがない。今世界の秘密を話してるんだぞ」

あ、そうだったの？

途中から話が見えなくなってきた、だんだん聞き流しモードになっていた。

「神が細々とした異界発生を抑制しているとはいっても、異界の発生そのものを止めることは誰にもできない。おまえが前にやった様に人為的に起こす者は止められないし、揺り戻して大きな異界が発生するのは受け入れるしかないんだが、そういうのは数が少ないし、大きければナナエが気づく。まあ、突発的に発生する様な異界がなくなるだけでも住人の安全度は格段に増していると言っている」

「はあ、すごいんですね」

「……おまえ全然すごいと思っていないだろう」

「話が大きすぎて実感がわかないんですよ。こんなグラフでくるし、いろいろ調べてるっていうのはわかりましたけど、何でそんな警察がやりそうなことを先輩がしてるんですか？」

そう、問題はこれである。神社の娘で神様のバックアップがあるとはいえ、なぜ高校一年生の女子が身の危険も顧みずにそんなことをしているのかということだ。

「異界に限らず、今までの世界にはなかったものについては一般的には今もないことになっているからだ。だいたい、おまえも経験者だろう。あんな異世界を警察がどうやって取り締ま

る？ 知っている人間がうまく立ち回るしかないんだ」

「いや、でも秋月さんは大人ですよ？ 先輩みたいな未成年にやらせないで、あなたがやればいいじゃないですか」

彼女はなにか、悪い感じの表情をした。

「私はあらゆる意味でこの街の人間ではない。しかも先ほどの電話で言われたとおり、土地の神から殺すと脅されるほどの部外者だ。むしろこの街の人間にとっては外敵に近いのに、そこまでする義理はないね。今だって十分に協力してるし、しばらくは協力を続けるつもりではないよ」

はあ……まあ、それは私も聞いていましたけど。

そもそも、なんで神様たちは秋月さんを敵視するだろう。異界とやらがはびこってるなら協力して何とかしてしまえばいいのに。

「私の家は市街地の方にあつたんだが、これほどはつきり宣戦布告をされては外に出ることもできない。私も腕に自信がないわけではないが神に襲われて生き残れる自信はない。そこで君の出番だ」

「……はい？」

なんか嫌な話の流れ……。

「残念ですが、私の出番はないです」

「奴隷だろ、働け」

「……今まで成り行きでただ働きしてましたけど、そういう命に関わるものは対象外です」

「違う違う、誰も喧嘩を売りにいけなんていつてない。私にも生活がある。外にでてしなきゃいけない用事を代わってほしいと言っただけだ。お前を巻き込むつもりなんかない。それに、私ができる角が立つことになるが、お前やナナエのような地元の人間であれば問題なんか全くないだろう？」

やっぱり、なんか危ないことをさせようとしている。

「問題あるじゃないですか。結局何か危ないことさせようとしている」

「そういう死の危険性があることは死なない巫女様に任せておけばいい。あくまでバックアップだ。サポート役の有無は大きいぞ」

坂木先輩の手伝いということなら問題ないだろうか。友達だし。

私が思案している様子を同意と勝手に決めつけて、秋月さんは満足げにうなずくと、デスクにとって返してタブレットディスプレイに何か書き付け始めた。

「とりえずこのメモに書いてあるもの買ってきてくれないか？」

私の端末に転送される。開くと下着などの衣服に身の回りの日用品、さらにはビールまで結構な量の物品がリストアップされていた。同時に、口座に数十万単位の金額が振り込まれた通知が、最重要メールとして銀行から送られてきた。

「……なんて額のお金を振り込んでくれるんですか。親が見たら怪しみますよ、これ」

「体でも売ったとか適当に言い訳すればいいだろ」

秋月さんがデスクにタブレットを放って椅子にふんぞり返った。

私はその顔めがけて手に持っていた雑巾を投げる。

「ちよ、ちよっと！ 危ないじゃない！」

寸前でキャッチされてしまった。なんか口調が変わったな今。

「馬鹿なこと言った報いですよ。それじゃ、さっさと買いに行ってくるので戻るまでここにいて下さいね。ああ、タクシー使いますけどいいですよね」

「……意外と短気だな、君。その金は自由に使ってくれていい。この部屋で待ってるよ」
いつてらっしゃい、と手を振る秋月さんに見送られて部屋を出た。



そんなやりとりから三日後。

「で、なんなのよこれは」

坂木先輩はデイスブレイにいつばいに表示された民放のニュース報道を見てばやいていた。

「先輩、お茶うけ何食べます？」

「そのチョコみたいなので」

先輩のティーカップの前にチョコクッキーをおく。買い物リストに大量に含まれていたお菓子である。クッキーやチョコレート、マドレーヌなど、日持ちするお菓子が段ボールに入れられて部屋の隅に積んであった。

先輩は苛立つ気分を食欲で晴らしているようで、クッキーを掴むと口に放り込んでばりばりとかみ砕き、それを紅茶で流し込んでいた。

「なんなのよこれは！」

そして叫ぶ。無理もない。

御坂市上空にあった浮遊大陸が工事中だった駅前ビルに接岸したのだ。昨日までは引つかか

る余地もないほど離れていたのに、夜の間に移動したらしく今朝になったらビルの高層部分、だいたい百階よりも上が浮遊大陸の中につっこんでいた。

もちろん大陸には実体がないので、ビルが崩れたり大陸から削り取られた岩石が駅前付近に降り注いだりしたわけではない。

ただ、世界的に見ても珍しい事態らしく、日本だけでなく海外の報道各社も一斉にこの御坂市に集まって朝からずっとこのニュースである。

それら番組では、日本政府は早々に調査隊を派遣することを決定し人選を開始したとか、国連のなんとかという機関が国際的な調査隊を組織して網羅的に調査すべきと声明を出したとか、中にはよくわからない宗教団体のエライ人をコメンテーターとして呼び、よくわからないコメントを言わせていたりするものもあった。その合間に、飽きもせず何度も御坂市の紹介映像が挿入され、坂木先輩の実家である神社や、観光都市としての御坂の玄関口である海側からの遠景、挙げ句の果てに『白亜の城』としてこの御坂学園の映像が流れていた。

そのせいだろう、最近研究室に来ていなかった坂木先輩だったが、今日は私よりも早く来て秋月さんとなにか険悪な話をしていた。

「何が？」

椅子にだらしなく座っている秋月さんが、しばらくしてから思い出したように先輩に訊く。
 ほとんど椅子からずり落ちそうになっていた。

「なんで浮遊大陸がビルに刺さってるのかってことよ」

「風で流れたんだろう」

「……今までどんなに風が吹いてもそんなこと無かったでしょうが。台風来たときも」

「知らんよ。私だって何でも知ってるわけじゃない。原因究明はともかく、上空から近寄れなかった浮遊大陸が地続きになったことで御坂市は世界中の注目の的だ。怪異の発生にどれだけ影響があるかもわからん。早いうちにあのビルを調べ上げて、何かあればさっさと無効化しないとならない」

「……あの、地続きになると注目を集めるんですか？」

秋月さんに聞いたつもりだったが、答えたのは坂木先輩だった。

「集めるの。なんでかといええば、浮遊大陸には空から近づけないから」

「え、そうなんですか？ 上空からの写真のような物を見たけど、前に」

「それ、間違いないCG。昔はヘリで上陸しようとしたりもしたらしいけど、アレに近寄ると人間は意識失うらしいの。意識だけならいいけど、心臓も止まることもあるみたい」

「……………え。なにそれ、初めて聞いた。そんなのが頭の上に浮いてるの？」

「ニュースでは言わないし、雑誌にも載らない。ネットのオカルト系の個人サイトになら書いてるかも」

「浮遊大陸については、どこの国でも機密事項だからな。情報を漏らしたりしないし、そんな記事をマスメディアに書いても配信される前に削除されるよ」

秋月さんがぎしぎしと椅子をならしながら続けた。

「浮遊大陸が出現してから一年の間は、どこの国も上陸に躍起になって挑戦したもんさ。なんせ、ファンタジーの世界にしかなかった空中戦艦や空飛ぶ空母が実現可能になるからな。軍事の他にも宗教家や好事家がなんとか到達しようとヘリや航空機をチャーターしていったが、だいたいの人間は生きてない。自動操縦や遠隔操縦で人だけを送り届けようとしても、空の上で脳死状態の人間ができあがるだけだった。多くの犠牲者をだした末にたどり着いた結論は、浮遊大陸から百メートル圏内に入った人間は昏倒して運が悪ければ植物人間になるということだ」

「……そんな危ない物が街に降りてきたって言うんですか？」

「安心しろ。もし大陸が海抜ゼロメートルまで降りてきても大丈夫だ。飛行して上陸しようとした場合は例外なく失敗しているが、大陸まで徒歩で到達できる場合は何の問題もなく上陸で

さるんだ。そのときは大陸は目に見えるだけの存在ではなくなり、普通の地面と変わらないらしい。地上から百メートルまで接近してきたとしても地面を歩いている限り人に影響はない」それはそれでビルとかにぶつかるようになるのでは。

「一般にはそういう話は伝わってないから、ただの新しい観光名所ぐらいにしかおもってないかもしれないけど、わたし的には困った出来事ってことなの。……あんだ以外の魔術師が出張ってきたりしないわよね？」

「それはわからん。幸い、日本政府はビルを封鎖して調査隊を派遣すると声明を出した。それを無視して忍び込みもうとする奴は官憲が取り押さえるだろう」

「魔術師だったらそのへん、どうにでもなるんじゃないの？ 幻覚見せたりとか」

「一人二人なら何とでもなるかもしれないがな」

椅子をくるりと回して、ディスプレイに並ぶ各放送局の中継を手で示す。
「カメラは誤魔化せない。これだけ入り口を撮影していると絶対にどれかには入る」

え、正面からはいるの？

こっそり入るなら裏口とかからじゃないだろうか………裏口も張り込まれるか。当然。
「……あ、それってわたしも入れないって事よね」

「先輩、あそこ行くんですか？」

ため息をついて肩をすくめる先輩。

「行きたくはないけど、街への影響でないわけないし行かないわけにはいかないでしょ」

そういうと、デスクの上に転がっていたタブレットを取って、『拝啓』からはじまるような堅いメールを書き始めた。



授業中に買い物リストが飛んできたので、学園の中でも輸入食品を扱うお値段高めのスーパーでいろいろ購入し、さらにリストにない高級紅茶やブランドお菓子を買い足して、タクシーで研究室に乗りつけた。

研究室の前まで運ぶのを手伝ってくれたドライバーにお礼を言って、扉を蹴り開けて中に入る。

浮遊大陸がビルに激突してからこっち一週間ぶっ続けで来ている坂木先輩は、両手いっぱい買い物袋を下げた私に「ご苦労様」と声を掛けてくれたが、もう一人のほうは「暫すらくれ

ずに、窓ガラスの中で風景を切り取るように並ぶニュース番組をじっと見ていた。

「このカップラーメンはどこに置いておけばいいんです？」

わざとらしく声を掛けてみたが、無反応。

コミュニケーションをとるのも面倒になって、私はがらくた積み上がる耐酸性の机のはじっこに袋ごと置いた。お腹がすけば勝手に漁るだろう。

もう、用は終わったので帰ってもいい。今日は買い出しという労働をこなしたのでここで掃除までしていく気はない。いつもなら、学園の中で一番高いところにある研究棟まで歩いてくるといっただけで、一つの労働といえなくもないエネルギーを消費してきているのだが、タクシー使って坂を登ってきたので実をいえば掃除する余力はある。でも、大儀そうな雰囲気を出すためにお茶を入れて一服することにした。

ポットにお湯を入れてカバーをかぶせて、お茶の缶を物色する。マリアージュのオールグリーン、ダーズリン、フレイバーティーはフォションで統一されている。

「ブラッドオレンジで頼む」

秋月さんの声が背中に刺さった。本当、自分の都合でしか話さない人だ。

ご要望通りのフレイバーティーを入れてポットを持っていくと、二人は飽きもせずニュー

スを見ている。最近はずがに浮遊大陸一色というわけではないけども、比率は大きい。世の中には他にニュースがないのかもしれない。

画面には、駅前ビルの先端が浮遊大陸の底部に沈んでいる映像が映っている。ビルは下の方こそ防音壁で囲われていてまだ工事中の雰囲気漂わせているが、少なくとも外壁についてはどこも完成しているように見えた。地面から立ち上がるそれが、吸い込まれるように岩盤に突き刺さっていて、まるで初めからそこにあつた大陸につながるつもりでビルを建てたかのよう自然さだった。

「……って、あれ？」

確か、大陸ってカメラに映らないんじゃないか？

「これ、CGの合成映像。実際には映ってない」

祭しのいい先輩が、映像の左上を指さす。そこには小さく『再現』と表示されていた。「紛らわしい……。雲みたいな物だから無視して生活できるのに、下手に重さを感じさせるような映像作らないでほしいですね。怖いから」

ふはは、とティーカップを受け取った秋月さんが変な笑い方をした。

「さて、どうしてこうやって人は見えないものを見るようにしてしまうのか？」

芝居がかった口調。私と坂木先輩は顔を見合わせた、口を開いたのは先輩だった。

「怖いから、見えるようにするんじゃない？」

「何が怖い？ 初めからないものを怖がるのはおかしな事じゃないか？ あの大陸はカメラに映らないしそれ以外のどのような観測手段でも捉えることはできない。客観的には『存在しない』ものだ」

「私がいうのもなんだけど、実際、そこにいる人には見えてるわけだし」

「そう、見ている人間にとってそれが真実だ」

カップを傾けながら、ディスプレイに向かって指を振る。ニュース画面に映っていた大陸のCGが消えて、ビルだけになった。

「人は真実を求めるものだが、真実は一人だけの物じゃない。客観的事実が人間の主観を通じて伝播されて真実が形作られる。主観である真実はその人にとって唯一無二のものだが、それだけだと妄想と区別がつかない。いや、自分だけの妄想でなくするために人は自分だけの真実であることを拒否し、皆に伝えようとする。このニュースだけの話じゃない」

秋月さんが私に目を向けた。

「少し前にあつたじゃないか。いくつか示された断片的な事実に対して複数の真実を提示した

女子中学生の話が」

瞬間的に敵意のような憤慨がお腹の下から沸き上がる。

「……じゃあ、あなたは真実ではなく事実を知っているって言うんですか？」

「そんなことは言っていないだろう。私を知っているのはあの場での告白だけだ。怒るなよ」

人のことをからかっておいて、飄々^{ひょうたつ}と言いつける。

「見たいものだけを見、知りたいことだけを知る。見たものは全て事実であり、見えないものを無理に事実らしく見せる必要はない。存在しないから見えないのに存在するかのように見せるなんて、本当なら批判されるべき行為だ」

「でも見えてるじゃないですか。実際に」

「『見える』ことは『知覚する』事とは別だ。忘れてはいけないのは、私たちが『見ている』と感じているものは全て脳がそう認識したものであって、光の反射を機械的に認識しているわけではないということだ」

「……それは屁理屈です。人が観測する場合、その結果から主観を取り除くことができない。それはわかるけど、人以外に観測ができないものを複数人の人間が観測した場合は、それは客観的な事実といえないんですか？」

「残念だが。空におかぶかと大陸が浮くようになる以前なら客観的事実といえたかもしれないな」

「なんで、それが問題なんですか？」

「あの大陸が、各個人で同じように見えているという保証がないからだ」

同じように見えている保証……？

「そんなの、窓から外を見ればあるのはわかるし、細部を見分けるのはその人の視力次第だし、多少変わって当たり前じゃないですか」

「だが、その保証はない。双眼鏡で除いて細部を確認し合ってもそれは主観のフィルタがかかっている。人間の目に映って脳髓の処理を受けた時点でそれは写真とイコールにはならない」

「印象は違うかもしれないですけど……。そうだ。絵のうまい人が集まって写生すればいいですよ」

「同じ事だ」

「でも……。……おかしいですよ。見たものがそのまま事実ではないなんて。目と脳の間割り込んでCGを挿入するなんて事、できないんだから」

「できないと思う？」

坂木先輩が問うた。私の答えを遮るように秋月さんが話を続ける。

「網膜で受像し、脳が解釈する。それが人体の仕組みで、これが事実だ。この解釈というのが真実を作ることに一役買っている。君は見間違えというのをしたことがないか？ 既視感でもいい。他には、いないはずの人を見たり、すぐ前にいる人に気づかなかったり、そういう経験は？ あるだろう。なぜそういうことが起こるかと言えば、人の視覚は意識の修正を受けるからだ。全て見えているはずなのに、脳は見えるものと見えないものを選別する。では、その選別の基準を定めるのはなにか？」

飲み干したのか、ポットから新しくお茶を注ぐ。

私のカップはぬるくなっていて角砂糖ではなくガムシロップを使った方がよさそうになっていた。

「目と脳の間割り込むんじゃないんだ。手の五指に同時に圧力をかければそこに『壁』を感じるだろう？ 交通事故で足をなくした人間はすでに無くなっているはずの足で痒みを覚えることもある。聴覚をなくした人が、聞こえないはずの音を聞いたという。健常者でも、誰にも

聞こえてない音が聞こえた気がする。何かを見た気がする。そんなのには枚挙にいとまがない。

私たちは日常的に存在しない光を見、存在しない音を聞き、存在しないものに触れている。

なぜ存在しないものを感じられるかと言えば、見たり聞いたり触れたりする前に光や音の存在を知り、普段から感じさせられているからだ。予め知らせ、予め感じさせることで人は学習していく。積み重なった学習は反射に繋がりが、行動は無意識に行われるようになる。脳は知覚に対して解釈を優先させて、世界を効率的に認識しようとするんだ」

環境透過ディスプレイに、遠くに見えていた大陸がズームアップされて表示される。そうだが、毎日私はこの部屋に来て、この窓ガラスに偽装された大型のディスプレイに映されていた浮遊大陸を見ていた。だが、これは明らかに窓ではない。ガラスの板ではない。

間違いなく、どこかのカメラの映像を表示している。しかも、表示しているだけではなく、何か付け加えたり、差し引いたりしている。自然さを装って。

その自然さ。カメラの映像なら、やはり浮遊大陸が映らないはずなのに、この窓に映っていないことはなかった。ニュースの報道と同じように作られた映像で真実を共有させられていた可能性は多分にある。

「話を元に戻そう。現場の人間には見えているのだろうが、テレビカメラの半導体素子には建設中のビルしか記録されていない。人にはそこにはかikai岩盤が浮いているように見えるんだらうが、自然界の光はビルからの反射光しかとらえていないわけだ。これは今までの多くの

カメラが証明していることだな。

しかし、そこにあたかもそう見えているかのような存在しない映像を合成すると、この映像を見た人間は『ビルの真下に行けばそのように見えるのか』と思うだろう。いくら知識として『浮遊大陸があらゆる計測機器に反応しない』ものだとわかっているとしても、自分の目には見えない、自分が見ている光景と似た様子を客観的な装置であるテレビカメラが写しているのだから、知識はたやすく印象に塗りつぶされてしまうだろう。説得力は圧倒的に映像が勝っているわけだしな。わかりやすいことは重要だ。『見たいものを見る』ことの最たるものだ」

「わからないわけではないけど、まるで禅問答です」

「いいところを突いたな。禅問答といえそうだし、より適切に言うなら詐術といえる」

「口がうまいのが魔術師のたしなみだから」

いつのまにか、先輩が買い物袋からお菓子を出して並べていた。先輩の前にチョコ味が集中しすぎていたので、太りますよ、と一言添えて二個ほど奪った。これは甘いので、紅茶にガムシロップを入れる必要はなくなった。

「説教の巧さは別に魔術師の専売特許じゃない。だが説教ですませるところを実体験として意識にフィードバックさせる技術は魔術師ならではの。大げさに言えば、意識と無意識の間隙

をつくのが魔術であり、無意識の集合を統率するのが魔術師だ」

とたんとうさんくさい話になってきた。

「……………」

「あ、信じてないな」

「そりゃあ、そんな荒唐無稽こうとうむけいな」

「荒唐無稽だったのは過去の話だ。他人の認識を誘導し不可思議な現象を捏造ねつぞうし体験させる。

この学園の七不思議は学園の生徒たちが認識して運営する現象だし、窓の外にわかりやすい例もある」

……そういえばそうだった。似たようなことを実践したことがあるのだから、荒唐無稽と切り捨てても自爆するだけだった。

ふと、この前の不思議体験がどう説明されるのか気になった。

お菓子を食べて、お茶を飲んで口をしめらせてから話してみる。

「この前、変なオレンジ色の物体に追いかけて、生きたまま燃やされそうなところを橋から飛び降りたんですけど、そのとき神様を自称する変な女の人に掴まれて空を飛んだんですよ。あれはさすがに私の勘違いで片付けるのは無理があると思うんですが」

先輩のカップが軽い音を立ててソーサーに置かれた。

「あるいは、『火難の呪い』で空中から蓋の開いた試薬瓶を作り出して恋敵の背中に酸をぶちまける、とか？」

そして思わぬところから反撃が来た。

先輩、あの神様を敬ってる気配全くないんだけど、悪く言われるのは我慢できないらしい。

「それは……本当にそうかなんてわからない。誰も見て無いじゃないですか。私が空を飛んだ事とは別です」

「その通りだ。神様を自称し空を飛ぶ女、密室において人を傷つける呪いは別物で、それぞれ別の理論がある」

「理論……？ あんなものに理論なんてあるんですか？」

秋月さんが怪訝けつげんそうな顔をした。

「人を納得させるのは理論だ。魔術や怪異においてもそれは変わらないよ。原因と結果をつなぐ線が人の観念の上にはか存在していないことがミソだ。いい機会だからそれも説明しようか。まず、坂木の神は風と冷気の神だ。そういう神がこの土地にはいることになっていて、多くの信者が奉り崇めている。いるという勘違いで神社という専用の施設を作り、毎年大々的な祭

りを聞き、人々はこぞって参加する。だからそういう神が生まれたんだ」

「……順番が逆じゃないですか？」

神様に物理的に救われた人間がいうのもなんだけど、普通、神様を感じさせる霊験あらたかな何かがあつて信仰が始まるんだと思う。それをハナから『勘違い』と断言してしまうのはおかしいのでは。

返ってきた答えは、私の思いに別の解釈がなされて斜め上だった。

「もちろんだ。神なぞいない。神を作り出すのは人間の想いだ。風を司り、雪を降らせる神がいるに違いないと思つたからいるのだ。他に理由はない。だから、あの神様は人間一人を持ち上げるほどの上昇気流を起こせるし、やれば気候を変えられることもできる。原因は人々の自然信仰、結果は自然現象の具現というところだ。

次は七不思議の場合だな。あれは怪談として生徒の間で共通の認識となつたことが原因だ。

誰もが知っている事は『見たいものを見る』ことの選別対象として認識されてしまう。たとえば、『夜の中庭で天体観測していた二人の少女』という事実が、怪談に詳しい生徒が目撃したことによって『夜に誰かが中庭で怪しげな儀式をしていた』ことに歪曲されて伝わることもある。その生徒は別に嘘をつきたい訳じゃない、友達とする話の種としておもしろおかしく

若干の脚色をしたというだけのことだ。しかし、聞いた側は怪談の一つとして記憶する。怪談というのはそこまで荒唐無稽な話じゃない。『ロマンチストな女子が何かのおまじないをするために夜中に中庭にいた』と認識するのは、そんなに抵抗のある事じゃないだろう？ そのように認識を深めることで怪談は広まっていき、一定のラインを超えると認識が現実を塗り替える。客観的な観測者であるはずの者全員が『勘違い』をした状態になり、観測対象は一般的な物理法則の外に置かれて別の法則が世界をハンドリングすることになる。この、別の法則に名前がついたのが『学園の七不思議』とよばれているものだ」

一息に話されても……。

「ちょっと、わけわかんない」

「なんかただなら語ってるけど、簡単に一言にまとめると、閉鎖的なコミュニティで醸成された共同幻想はそれだけで一つの怪異として成立するってこと。そして魔術師っていうのは、そういうのを積極的に使う詐欺師のこと」

「詐欺じゃないだろ詐欺じゃ。異界作成までは詐欺かもしれないが異界の中では真実だぞ。

最後に、魔術師が使う魔術だ。共同幻想としての怪異よりもう一步踏み込んだものになる」
まだあるのか。

「同じ共同幻想を多くの人数で共有することは歴史的な下地でもない限り難しい。共同幻想を知っている人間のいる土地から離れてしまえば同じ事はできなくなるのが普通だ。だから魔術師は携帯できる魔術を作り出す。魔術を仕掛けた対象と自分だけの共同幻想を即席で作り返すのだ」

「……どうやって？ 今みたいに長々と話すんですか？」

「違う。人間には想像力という便利な力があるから、それを利用するんだ」

秋月はお菓子に埋もれていたタブレットをデスクから発掘すると、クッキーの油がつくのも気にせずに液晶に指を走らせた。

ディスプレイに並んでいたニュースのウィンドウが端にまとめられ、変わりにおどろおどろしい文字と、インクが垂れかけたような線で描かれたマークのようものが表示された。

「これはゴエティアという古い本に書かれていた絵だ。昔の魔術というのは自己修練の一分派というレベルで、さまざまな魔法円をマインドセットの手段として使っていた」

「なんか、急にわからない単語が出てきたんですけど」

ゴエティアとか、マインドセットとか。自己啓発っぽい。

タブレットを持った彼女は、口で説明せずにディスプレイの横に検索結果を開いた。

——Goetia。ギリシア語のゴエティアがラテン語化したもので、呪術・妖術などを意味する語である。近世のグリモワール『レメゲトン』の第一書の表題としても知られており、『ゴエティア』といえば一般に同書のことを指す。

——マインドセット。決定理論、一般システム理論において、経験、教育、先入観などから形成される思考様式、心理状態のことをいう。暗黙の了解事項、思い込み、価値観、信念などがこれに含まれる。

うん、自己啓発っぽい。

「今は違う用途として使われている。こういうものはオカルト的なものを想起させ、限定的な異界を作り出す助けになる。魔術師はこのような象徴をうまく使い、対象と自分の間に一種の別空間を作り出すんだ。それは真性の怪異のように空間の浸食までは起こさないしろ、現実世界に一枚多くレイヤーが敷かれるような状態になる。また、魔術師は一般人よりも共同幻想に対する親和性が高いために、想起される空想は魔術師のパersonalityを色濃く反映する。つまり、魔術師が想定する世界観が対象との間の関係を決定し、その世界だけで通用する因果によって相手に影響をあたえるのが魔術師が携帯する魔術というものだ」

ええと……それって簡単に言えば。

「……暗示のようなものですか？」

「天満寺、鋭い」

先輩がにやりと笑う。

秋月さんは逆に面白くなさそうに頭をかいた。

「『暗示のようなもの』ですませるのは語弊があるんだが、お前のような初学者に向けての説明として極めて平易かつ多くの例外とその影響範囲を無視して言えば、そうだ」

そして、急に面倒になったのか、講義を打ち切って遅ればせながらお菓子に手を伸ばす。すでにチョコ味はなく、バナラのみだ。

デイスブレイから魔法円が消え、再びニュースが一面に並ぶ。

ちようど国の記者会見が始まったらしく、どの放送局もその中継を流していた。

「……はい。調査隊の組織は滞りなく、完了しています。人選は万全を期し、国の調査機関のメンバーを主としています。経験も実績も申し分なく、さらに現地に詳しいスタッフも招いています」

『質問いいでしょうか。過去、浮遊大陸の調査は幾度となく繰り返されてきましたが、芳しい成果があがったという報告がありません。また、国外では浮遊大陸に入った調査隊がならちか

の事故、もしくは異常に遭遇して全滅するなどの情報もありますが、今回の調査についてどのような計画と対策を取られているのですか？』

「はー。よく調べてる記者もいるもんだな……」

デイスブレイの前で小馬鹿にするようにお茶を飲む魔術師。なぜか楽しそうだ。

『調査計画については機密保持のためお知らせできません。ただ、対策については万全を期しております』

「実際は、無計画なんだけどね。先生、見る？」

「おう。もう計画書渡されてるのか」

「名ばかりのね。見てもたいしたこと書いてない。最低限の目的も、調査をやめて引き返す目安も、何も」

先輩が自分の端末を触ると、デイスブレイに書類のファイルが表示された。秋月さんがページをめくるジェスチャーをすると、立派な表題のついた表紙がめくれ目次が現れる。さらにめくると、見出しとその下に数行しか書かれていないページが何ページも続く。

「中に何があるのかもわからないから、その辺は仕方ないんだろうが……。すごいな、ほとんど白紙だ。指揮系統だけはしっかり書いてあるな」

一ページだけ、賑やかに関係者が配置され、矢印がたくさん引かれているところがあった。

「現地のメンバーよりも責任者の数の方が多い。船頭が山に登るパターン」

というか、何でこの人たちナチュラルに計画書とか持つてるの？

「……計画書って何で持つてるんですか？」

「言っでなかったか？ ナナエはあの調査隊のメンバーだ」

「……そうなんですか？」

「さっき言っでた現地のスタッフって言うのがわたし」

自分を指さす先輩。

「本当は一人で先に入りたかったんだけど許可おらなかったし、強行してもあれだけ人がいるところで何かしたら表沙汰になるから、ついてくことにした」

はあ……。相手は女子高生だっでわかってるんだらうか。

「明日実際に中に入るっていうのに、この計画書はむしろ不安になるな」

「なんとかするわよ。大人たちがたくさんいるし」

「調査隊のメンバーは……。国の研究所の連中ばかりだな。モヤシだ。エレベーターがつかえないあのビルに登るには辛そうにみえる」

計画書最後についていたメンバーの顔写真だけでモヤシと判断する秋月さんに、先輩が駄目元っていう雰囲気でした。

「一応訊いておくけど、なんかアドバイスなの？」

「一つだけあるぞ。あのビルはすでに異界だ。上から下まで。それを忘れないようにな」

短いアドバイス。

でもそれって、先輩の特技……というか体質が無意味なことなのではと思ったけど、言わないでおいた。



彼の旅の中で、船という選択をすることは珍しい。

職業を名乗るときそのなかに海を表す単語が入っていれば、大抵は海辺か、海そのものが仕事場である。彼の前職は海という単語そのものであったわけだが、移動手段はヘリか飛行機であって、船を実際に使うことはほぼ無かった。

彼の趣味は旅行なので、船旅自体が嫌いだということは絶対ない。結局、スピードの問題

だったのだ。今はこのようにゆったりとした交通手段を選ぶ自由もあるわけだし、転職は悪くない選択だったのだろう。

とはいえ、自由はあっても時間は常に足りない。船旅を選んだのは、文句を言ってくる上司が遙か地球の裏にしかないからであって、時間的余裕から選んだわけではない。飛行機のチケットを取るために旅行代理店に電話した時、ミサカに行くのに飛行機はもつたない、ぜひ船でいったほうがいい、と勧められなければ、彼だって迷わず飛行機で移動した。その程度の理由だ。

確かに船は悪くない。食事はうまいし、バーは二十四時間営業していて酔いつぶれたからと言つて路上にたたき出されることもない。他の乗客も船を選ぶだけの時間的精神的余裕のある人間ばかりで、話をしていても楽しかった。残念なのは女性が総じて年齢高めで既婚者であることか。だがそれは日本という国の特色で、若い者には金が無く、豪華客船のクルーズで贅沢をする文化もないから仕方のないことなのかもしれない。

あと三十分で港に着く。

治安のいいこの国で窃盗に遭ったことはないが、一応荷物のチェックをした。あてがわれた一等客室のベッドの下からベルゲンを引つ張り出し、中に入った装備が足りているか数え

る。何か一つでもなくなれば、彼が、というより、それを盗んだ人物に大変な災難が降りかかる。それならここで判明して、彼が個人的制裁を加えるだけですませた方がお互いに楽だ。幸い、無くなった物はなにもなく、船内の土産物屋で買った置物と団扇が増えているだけだった。船内放送が、あと二十分で港にはいることを告げた。

フェリーのデッキに上るため、客室から出る。旅行代理店のエージェントの言葉を確かめるためだ。飛行機とほぼ同額の代金を払って乗る価値が、この入港間際の十分間にあるらしい。潮風の強いデッキに上がる途中でスタッフに手渡されたイヤホンを耳にねじ込むと、鉄琴のような甲高いオーブニング曲とともに女性の声が聞こえてきた。ご丁寧な英語である。

「——ミサカシティ。古くはこの地方の宗教的中心で、今ではヴェネチアを最新設備で再現した水上都市です。海からの眺望を指して城塞都市と呼ばれることもあり、特に夕焼けが沿岸部のタワーホテルを赤く照らす景色は、日本の新百景でグランプリを数度受賞しています。ミサカシティは国の観光立国宣言のモデル都市として知られ、人口は……」

観光ガイドによる説明。

このような、自らの築いてきた歴史を借り物で覆って取り繕う姿勢は、すでにこの国に十数年住んでいる彼にとっても未だに理解できない行為である。ローカルの宗教施設と、ヴェネチ

アと並べるには貧相な運河以外に取り立てて観光資源もなかった地方都市が、経済縮小に恐怖する中央政府が突如打ち上げた観光立国のお題目と多額の公費投入によって、ケバケバしく飾り立てられているに過ぎない。イヤホンから流れる観光案内が言うように、確かにその景色は美しいといえば美しいが、こういう美しさは香港でも台北でも見られる類のものであるわけで、彼のように外国を飛び回る職の人間からすると食傷気味の景色である。

外国人向けに翻訳された観光案内は、外国人向けにオーバーな表現を用いつつ、美辞麗句を流し続けていた。

「ミサカシティの歓楽街は、江戸時代まで遡る埋め立て地の上に作られ、作られた小島と小島の間は運河として早くから整備されてきました。その日本では珍しい地勢を生かすために国費が投じられ、ぐるりと歓楽街を囲むようにデザインされたアミューズメントリゾートと、尖塔をイメージしたホテルタワーが作られ、この美しい景観が完成したのです。城壁に囲まれた運河の街。誰もが憧れるファンタジーのような町並み。ニューヨークタイムズでは『東洋のヒストリックモダン』と称され、国内でも『エキゾチックヴェネチア租界』と呼ばれております」

洗脳めいたキャッチコピーを繰り返すガイド。商業施設が入った白いビルと、そのビルとビルの上に立つタワー型のホテルは、海から直接立ち上がるように建っているために中世ヨー

ロッパの城塞のようにも見えなくはない。その白い城壁の向こう側のビルはただ一つを除いて他は見えないことも、城壁のように見える一因だろう。

「今年、ミサカには新たなランドマークが誕生します。ミサカステーションタワー。歓楽街の奥にあるミサカのもう一つの玄関口、ミサカ駅直結の複合ビルが今冬オープンします。海側からは、このステーションタワーが白く輝く城壁の向こうに見られるようになるでしょう」

その、城壁越しに見える唯一のビルが、この建設中の駅ビルだった。外装の工事はほぼ終わっているらしく、こうして遠くから見分にはすでに完成しているようにも見える。

「まもなく、本船はミサカ港に到着いたしますが、その前に最後のビューポイントでしばし停泊いたします。カメラをお持ちのお客様は是非左舷デッキにて撮影下さい。それでは良い旅を」

耳からイヤホンを外すと、他の観光客が次々とデッキに上がってきた。全て日本人だ。ファインダーをのぞき、シャッターを切るが、目当てのものがやはり写っていないことを確かめて落胆の表情を見せる。彼らは水上の城塞都市ミサカを撮影に来たのではないのだ。

一人、二人とデッキから人が去って、再び船が動き出した。

彼も自室の荷物をまとめようと階段に足をかけたが、最後に振り返る。

「……俺が来たからには、今冬のオーブンは無理だな」

呪いのような言葉かもしれない。だが事実だ。

城壁の奥にそびえる駅ビルの先端は、浮遊大陸のなかに埋まっていた。

城壁と尖塔と浮遊大陸。

没入型のロールプレイゲームでしかお目にかかれなかった景色だ。ただ、ゲームではあり得ない潮の匂いが鼻腔に残っていた。